問題だけにとどまらず、それまでの数年間はその間違ったデータによって多くの研究者が惑わされることになる。そのような例はこれまでに数多く報道されている。とくに、日本では少ないが(もちろん少ないということはそのようなことが存在していないということを意味しない。要するに表面化しないだけのことであろう)、欧米では露顕すれば、調査委員会がつくられ、詳しい報告書が提出されることになる。

本書では、そのような科学や医学の研究でみられるさまざまな不正行為、つまり、単純な「不注意」や「過失」や「誤り」から、故意の「でっちあげ」、「データ操作」、「捏造」、「詐欺」に至るまでの種々の不正行為について、詳細な事例をもとに、論じられている。有名なニュートンやメンデルの話から、自殺したカンメラー、ノーベル賞をもらったカレルの不死の細胞のこと、著名な心理学者のバート、かの悪名高いルイセンコ、皮膚移植で不正を働いたサマーリン、贋物であるピルトダウン人の話などなど、およそ五〇例以上の実例についての紹介である。とりわけ、実際にはやっていない実験の捏造や実験データの勝手な変更や操作、自分の仮説に相当しないデータの破棄などの実例の報告が多く取り上げられており、科学者の正直さを信じて疑わない科学や医学の素人にとっては、まさに慄然とするような内容となっている。こんな事例を次から次へと読まされると、一体科学者や医学者なんか信用できるのかと思いたくなる位である。それでもおそらく、これは氷山の一角であろう。

著者は、テルアビブ大学のウイルス学の名誉教授であり、医学の専門家であるが、また科学史家としてもよく知られている。それだけに、本書の内容は事例に則って実に正確で、きわめて学問的でもある。また、酒井、三浦による翻訳がよくできており、読みやすく、「事実は小説より奇なり」で、表現は悪いが大変に面白く、時間を忘れて読み耽ってしまう。

しかし、われわれ科学や医学にたずさわっている者は、面白がってばかりいてはならないだろう。ひょっとしたら、これはわれわれ自身の未来の話なのかもしれないのである。日常のいろいろな場面で、いつもわれわれを待ち構えている『罠』は魅惑的であり、つい不正行為の誘惑にのってしまいそうである。そんなときに、この書を思い出すことにしよう。

(松下　正明)

〔工作舎　一九九〇年　A五判　三六三頁　定価三、二〇〇円〕

中西啓著

『シーボルト前後、長崎医学史ノート』

付録「三瀬諸渕『麦酒醸造説』」

先般ポンペ顕彰記念医学講演会が、東京、大阪、長崎で開催され、興味深く、医学の原点を学んだ。

現代日本医学教育記念の地にある長崎大学医学部は『長崎医学百年史』の編纂を昭和三十年から開始したとある。本書の著者、中西啓先生は当時医学部三年生で編集執筆に参画、爾来先生の研究は人一倍熱心で、本業後の睡眠時間を少なくしてまで続けられ

今日に至っている。本書は『長崎県医師会報』の昭和四十七年五月一日号から、五十四年十一月十五日号まで百回に渡り「長崎医学史ノート」として好評連載された。

平成元年十月、長崎市の文化行政は市制施行百周年を契機に、近代日本の学問や文化の発展に寄与したシーボルトを顕彰する記念館を建設した。つまり本書はこれを記念して出版された。シーボルトと門人関係の資料が多数収録されていることより『シーボルト前後』と改題、時代順に配列、一部訂正加筆出版された。版元は長崎で有益な文献資料の出版に健闘している著名な長崎文献社である。

本書の目次は大きく五つの見出しに分類されている。第一は古代から南蛮医学まで、第二はオランダ医学全盛期、第三が表題と同じシーボルト前後、第四が明治医制前後、第五が原爆被災とあり、終わりに長崎の医史学を通観して、古代から中世にかけての資料不足について、著者の博識から中国の古典『山海経』『漢書』『魏志』『三国志』『魏書』等々の中より医学史における日中関係を振返っている。付録に新資料として今度楠本家よりシーボルト記念館に収蔵された三瀬周三の翻訳『麦酒醸造説』を翻刻掲載している。

第一章に一一点、第二章に一〇点、第三章に三二点、第四章に八点、第五章に二点、計六三点の資料を所収している。仕上り体裁はB五判軽オフセット印刷で定価税込一、〇〇〇円。内容から見て大変安価に仕上っている。安価で小部数の「まじめな本」が苦闘している。過度の豊かさから生活感覚に忍耐・持続・緊張を要する読書力を失わせた。街の書店はどこも同類の多量生産本で埋った。つまり「売る必要」が「質の高さ」を忘れ、本を選ぶ楽しさを奪った。「出版の使命」は問われる。

本書は出版文化の原点を視るようで、出版社と著者の努力をさわやかに感じる良書である。エンボス紙の表紙に掲載した写真は鳴滝塾跡であり、ここにも、いずれシーボルトと弟子達の原点を想起して、木造の鳴滝塾が復元されることだろう。本書のタイトルにある資料について全て述べることは紙数の都合で不可能である。読者も目次の中から興味あるものより頁をくって読み出すこと勝手次第。その内容は、「シーボルト先生の名著を残した呉秀三先生と長崎の古賀十二郎翁の対応」。「シーボルトは名医、良医、大医なのか?」。「先輩ケンペル、チュンベリーの顕彰碑を出島に建立したシーボルトと石碑の材質、石工のこと」。

何年か前に長崎に台風が上陸した際、市内の河川が氾濫した。何んでもその前の河川工事にも問題があった由で、大水で著者が長年蓄積した蒐集資料の多くを台無しにしてしまった。私としても残念に思い深く同情している。

台風といえば一六二年前の「文政十一年のシーボルト事件の発端になった『子*の年の大風』は本書によれば、同じく長崎市街地に壊滅的な被害を与えている」、「ポンペは日本の写真史でも忘れることのできない人物で、有名な上野彦馬だけでなく松本良順、古川俊平や人によっては堀江鍬次郎、内田九一などが『ダゲリア術』をポンペに学んだ。福岡藩医の古川は廃藩後、写真家として開業した。」等々郷土資料を含めての紹介は、見出しより想像で

きない多岐な内容。一読してから「長崎の旅」を楽しんでみるのも一興です。一、二写真の入れ違いもあるが編集の手違いと思われる。希望を述べれば資料を満載した活字人間を喜ばせる資料編として文字の大きさ、文字のカスレが少し気になる程度。最近は色刷が多くなり高価格になる資料類の出版傾向に対し、本書のようなB五判本文一〇八頁、付録八頁のノート仕立の編集は、いかにも質実、謙虚な著者の姿を彷彿してほほえましく、資料の原点を知る体裁と言える。今さら紹介もないが著者にはシーボルトに関して小冊子『シーボルト評伝』(一九六二年刊、シーボルト先生史跡保存会)『長崎のオランダ医たち』(岩波新書、一九七五年刊)などがある。両書を書架より手に取って再読してみた。次いで本書を興味深く読ませていただいた。

(関口　忠志)

〔長崎文献社　一九八九年　B五判　本文一〇八頁　付録八頁　定価一、〇〇〇円〕

フィリップ・アリエス著、福井憲彦訳

『図説・死の文化史――人は死をどのように生きたか――』

本書は一九八四年に亡くなったアリエス Philippe Ariès が、その前年に刊行した Images de l'homme devant la mort の全訳である。フランスの心性史家アリエスについては『子供の誕生』『死と歴史』『日曜歴史家』(いずれも邦題)によってよく知られているので、経歴等の紹介は省略させていただく。彼の歴史に対する関心は、人々の日常の営みを支え動かしている心がどう変化してきたかという点に集中しているが、人間の営みの記録である歴史の中にそれを読みとることは大変むつかしいことである。歴史学は言うまでもないことであるが、よく吟味(確実信憑性の批判)した史料を操作することによって構成される必要があるが、アリエスの歴史はそこを欠いている。遺著となった本書も墓石に刻まれた図像や絵画の読解を通して、人々が死をどのようにとらえてきたかを分析したものであり、文字表現された史料を用いている部分はわずかに墓碑銘にすぎない。図像読解には歴史家の主観が入りやすく、興味に沿って読み込まれる危険性は高い。主観・想像の世界を楽しむのは歴史小説や随筆の得意とするところであるが、アリエスの歴史学はその楽しみを備えた魅惑的なものである。彼はこれまで多くの人が見過してきたこと、言及することを避けてきたことを、しかも現代の人々にとって関心の深い問題を日常感覚で平易に解き明かしてくれるだけでなく、原始古代から現代に至る一貫作業、連続した歴史をわれわれに呈示している。彼の深い洞察力によって築かれ、筋道のたてられた心性の歴史を、文字で表現された史料をもっていかに肉付けしていくかが今後に残されたわれわれの課題といえる。

さて、本書は八章から成るが、第一章「墓地と教会」では、はじめ都市の外へ排除されていた死者が次第に都市の中心に位置するようになった経過を論ずる。市外の街道筋にあった墓が三、四世紀のころよりキリスト教の聖人崇拝の影響をうけて墓地に教会